質的な仕事である，植物資料収集活動の目的と実際が語られ，収集資料の標本化，生植物の栽培保存管理について，具体的に記されている．栽培部門，標本部門，研究教育部門，事務部門と分化した植物園が，互いに連携して事業を行うスケールの大きさには，わが国の現状と引き比べてため息が出る．本書の中頃では，そういう基礎に立った植物園の様々な活動が紹介され，そして後の1／3では，世界の植物園，とくにそのコレクションや活動の特色が，実際に目にした印象をもとにいきいきと綴られている．本書は朝日園芸百科の連載記事をまとめ直したものだが，植物園というハコ物は比較的容易に造れても，その運用の理念の確立とそれを支える確固とした財政基盤がなければ，自然と人間の共存に役立つ植物園は成り立たないという，著者の主張を裏付けるものとなっている．　(金井弘夫)

□大場秀章：**バラの誕生**　249 pp. 1997. 中公新書．￥760.

古来，バラは園芸植物の筆頭の地位を占めて来た．そういう園芸バラ作出の背景にある，科学と芸術のかかわり合いを探ろうというのが，著者のもくろみである．まず，園芸バラの発達は1867年を境として二期に分かれるという定説にもとずき，オールドガーデンローズの歴史が古典と最近の研究成果を元に語られる．そして東洋からのコウシンバラの導入をきっかけとする，モダーンガーデンローズの爆発的発展を要約する．後半はたくさんのバラの花譜について，著者の鑑識眼を通した紹介に始まり，ヨーロッパへ導入されたバラの原種の再発見のはなし，著者が訪れた中国やヒマラヤのバラのはなしから，世界各地のバラ，日本のバラと話題が移ってゆく．園芸家の著書とは一味ちがったバラの本である．　(金井弘夫)

□柏岡精三，荻巣樹徳（監）：**絵で見る伝統園芸植物と文化**　16＋278 pp. 1997. 発行者：柏岡精三．非売品．

電気事業を社業とする（株）関西テック（大阪市北区中之島6-2-27．TEL. 06-448-5711）の創業者が，兵庫県山崎に荻巣樹徳氏（王立園芸協会ヴイーチ賞受賞者）の協力で，日本の伝統品種一千余点を集めた花菖蒲園を造った．園内に伝統植物研究所を設立し，わが国独特の園芸植物の品種の収集維持につとめるという．本書はその中から60種類を選び，今に残る品種の写真，図譜，絵巻，絵画，絵草子，道具類の絵，衣服の文様などをカラーで記録し，解説をつけた豪華本である．解説は主に由来，鑑賞，その後の三つの見出しから成る．由来ではその植物の原産，野生にはじまり，江戸時代におよぶ品種の変遷を記す．時代ごとの品種数の表がついている．鑑賞ではその植物の着眼点，評価法についてのべる．その後では明治以降の盛衰が記述されているが，戦前はともかく，敗戦後の経過は盛衰よりは絶滅の記述の方が専らなのは気が滅入る．再評価の機運が興っても，新たに野生品から昔の変化を見いだそうとするのでは，賽の川原さながらである．歴史のある植物園が保持していた筈の品種群で，最近は話題にのぼらなくなったものも少なくない．私立の機関のこのような努力を，国公立植物園などはどう見ているのだろうか．種類ごとの参考文献が巻末に，学名を付した品種名のリストが別冊としてある．　(金井弘夫)

江戸時代に発達した日本の園芸植物は世界に類を見ない独特なものである．本書はその文化的意義と保存を目的として書かれたものである．今までサクラ，ツバキ，ツツジ等，個々の植物について書かれたものはあるが，全体の植物についてまとめられたものは初めてである．ツバキやツツジなどよく知られているもの以外にもタンポポ，ボケ，ナデシコ，サイシン，セキショウ，ホトトギス，ツワブキ，ナンテン，ヤブコウジなど，一般にあまり知られていないのも含めて33種類の植物の園芸品が紹介されている．本の分量の制約から，それぞれの品種を詳しく紹介することは困難で，主にそれぞれの植物の発達の由来に力がそそがれている．江戸時代の文献を引用し，それにある図を多数載せ，普通には見ることのできない文献も載せられていて意欲的な内容である．本草図譜など江戸時代の文献から引用された植物や，風俗，植物をあしらった着物などのきれいなカラー写真があって楽しませてくれる．

品種の解説がほとんどないのはやむをえな

いし，アオキ，ザクロ等一部の植物は載せられなかったとことわっているけど，今日でも普通に触れることの多いモクレン，サザンカなど，いくつかの種類が抜けているし，ツツジ類ではサツキとキリシマツツジだけで，江戸時代に流行し今日でも一般に見かける，オオムラサキ，モチツツジ，ヤマツツジ系の解説が殆ど欠けているのは残念である．また文献も詳しく見たわけでないけれど，必要なものが落ちているのではないかと思われる．膨大な園芸品を少数の協力者のもとで書くことに無理がある．この本でもくろまれているように，古典園芸植物の調査と保存はさらに発展させる必要がある．それぞれの専門家の協力のもとに，現在どのような古典園芸植物があり，それがどこに保存されているか調査しなければならない．この本はその必要性を教えてくれる．

本書を出版した伝統植物研究所は日本の伝統的園芸植物の収集保存に取り組み，現在4,000品種ほど収集しているという．本書の付録として，研究所で集めた品種名の明らかなものの目録があるが，全体で1,000品種程で，植物によって精粗はあるが，現存の品種数からみるとごく僅かである．古典園芸植物の収集保存は，称賛される大切な行為であるけれど，民間機関であることに一抹の危惧がある．日本の公的機関では野生植物の系統保存は行っているが，園芸植物の保存には無関心で，今まで保存していたものもやめたりして，保存はもっぱら民間に依存している状態である．多摩の森林総合研究所でサクラの品種保存を行っているのが唯一の例であろう．園芸植物は一度絶えると再びその系統を得ることは不可能である．永続性のある公的機関の植物園や試験場で，日本の文化遺産である名前の正しい園芸品種の保存を行うことも，大事な系統保存の一つだと思う．（山崎　敬）

□大場秀章：**江戸の植物学**　217＋5 pp. 1997. 東京大学出版会．￥2,600.

東大総合研究博物館で行われた公開講座の内容である．貝原益軒にはじまり，稲生若水，松岡恕庵，小野蘭山，岩崎灌園，宇田川榕庵，水谷豊文，飯沼慾齋，伊藤圭介に至る本草家と，川原慶賀，賀来飛霞らの絵師の作品群，それにからむケンペル，シュンベルグ，シーボルトら外国人学者の交流と欧和相互の影響を軸に，日本の近代植物学を生む基となった江戸時代の博物学の再評価を，読みやすい文体で述べる．これだけのはなしをするには，文献について通覧するだけでも大した努力だが，欧州におけるこの視点からの意識的な調査が行われたことも見逃せない．生物多様性という立場から博物学が見直されようとしているとき，その理解の普及に役立つ本である．（金井弘夫）

□浅野一男：**植物への挽歌** 314pp. 1997. 南信濃新聞社出版局．￥1,800.

伊那谷をフィールドとして40年間，研究に過ごした著者が，失われていく植物を記録に留めるべく著したもの．春夏秋冬の4部に分けてあるが，これは季節によるものではなく，開発による植物の危機，人間生活の変化による危機，植物の生活の知恵と人間の干渉，植物と民俗，という仕分けになっている．春と夏で全体の2/3を占める．新聞の連載記事を元にしているので，一般向きに読みやすく書かれているが，現地を調査した者でなければ書けない内容である．モリアオガエル保護の名目で行われた工事のため，水生植物が無くなってしまったというような具体例が，ほとんどすべての章に綴られており，かつての豊かな自然が失われていく有り様を，ため息とともに記述したものが多い．挽歌と名付けた気持ちが表れている．伊那谷に限らない自然破壊の様々な姿を知るのによい本である．また植物名の地域による違いや，植物に関わる民俗行事などが分布図と共に記録されていて，この方面の参考にもなるだろう．最後に下伊那に於ける絶滅危惧植物400余種類が，危険度と共に示されている．メガルカヤ，イラクサ，ハンノキ，キツネノマゴ，ウラシマソウ，サンショウモ，サイカチ，シュンラン，ネジバナなどが絶滅とか危急とか書かれているのを見ると，あらためてその深刻さがうかがわれる．（金井弘夫）

□Ettl, H.und G. Gärtner: **Syllabus der Boden-, Luft-und Flechtenalgen** 721 pp. 1995. Gustav Fischer, Stuttgart. ca. ￥19,400